

ひきやま
曳山

種 別	小松市指定文化財 建造物
指定年月日	昭和40年11月3日
所在地	大文字町、京町、材木町、西町、 中町、龍助町、寺町、八日市町

菟橋神社と本折日吉神社の春の祭礼（お旅まつり）に曳山が出るようになったのは、明和3年（1766）の龍助町・西町が始まりといわれている。当初は簡素な屋台で多数出ていたが、その後、寛政年間（18世紀末）には松任町、京町、中町、龍助町、西町、寺町、大文字町、八日市町の8町に豪華な曳山が成立した。その後、東町、材木町が加わり曳山は10基となった。昭和5・7年の大火で松任町、東町の曳山が焼失し、現在の8基となった。

曳山は、台輪と呼ばれる4個の車輪をつけた台車の上に舞台と楽屋を配置した形をしている。釘を使用せず、仕口等の組み合わせや縄での緊結で組み立てており、組み立てと解体が容易になっている。

橋北の三町（京町、中町、材木町）の曳山には舞台と楽屋に共通の屋根が、橋南の五町（龍助町、西町、寺町、大文字町、八日市町）には舞台と楽屋にそれぞれ個別の屋根が設けられている。舞台前方には花道の床板が収納されており、上演の際には前方に引き出して高欄を取り付ける。舞台には朱漆塗りの高欄が巡らされ、漆塗りの螺鈿らでんの4本の柱で天井と屋根を支えている。また曳山の建造や装飾ぬしには、小松を中心に金沢や美川などの周辺の大工や塗師が携わったと見られている。



大文字町

舞台天井には極彩色の雲竜の図があり、楽屋後方の見送りの棧唐戸は那谷寺三重塔の彫刻を模した物である。



京町

台車は総ケヤキで造り、村上鉄堂の彫刻で飾られる。見送りの透かし彫りは吉田榎堂のものである



材木町

舞台格天井には粟生屋源右衛門の花鳥図が、楽屋天井には龍の墨絵が描かれる。



西町

舞台天井には唐獅子牡丹図がある。棟札からこの曳山は文化 15 年(1817)藤山清九郎の作と判っている



中町

舞台の柱は螺鈿で飾られ、屋根下の組物は彩色で立体感を表現している。



龍助町

規模が大きく、二重の屋根を持っている。町名に因んで龍の彫刻や墨絵が施される。



寺町

随所に意匠や工夫が凝らされる。舞台屋根には大聖寺藩主から賜ったという宝鐸ほうちやくが吊るされる。



八日市町

二重屋根を持ち、那谷寺の鐘楼を象かたどったといわれる。平成 14 年には四神の天井画が新調された。